

ピンクリボンあだちについて

ピンクリボンあだち参加報告
ならびに乳がん検診について



1. ピンクリボン運動とは
2. 足立区でのピンクリボン運動
3. 乳がんについて
4. 対策型足立区乳がん検診状況
5. 乳がん検診について
6. まとめ

1. ピンクリボン運動とは

ピンクリボン運動

ピンクリボン運動は、80年代にアメリカで、乳がんで亡くなられた患者さんの家族が、「このような悲劇が繰り返されないように」と願いをこめて作ったリボンから始まった運動です。

アメリカでは、この運動の広がりにより、乳がんに対する意識が高まり、乳がんの検診受診率も高まることで、死亡率が低下し、ピンクリボン運動が広く認知されるようになりました。

日本でも近年、この運動は普及し、行政、乳がん関連学会、企業、民間団体などが「乳がん」の、早期発見、早期診断、早期治療の大切さを伝えるための活動を展開しています。

ピンクリボン

ピンクリボンは、乳がん啓発のための世界共通のシンボルマークです。早期発見、早期診断、早期治療の重要性を伝えるために使用されます。

統一したデザインはなく、ピンクリボン団体や企業、イベント事務局、個人などが自由に作成できます。

足立区役所では、ピンクリボン月間の10月に職員の方が胸に付けます。

また、ピンクリボンの他にさまざまな色を使用した‘リボン運動が展開されています’。

ピンクリボン運動の参加方法

- ① 乳がんについて正しい知識を身につけ、理解を深めること。
- ② 月1回の自己検診を行うとともに、年齢やリスクに応じた検診を受けること。
- ③ イベントに参加すること
- ④ 自分の周りの人に乳がんの正しい知識を伝え、検診受診のきっかけづくりを行うこと。
- ⑤ ピンクリボンを身につけること。
- ⑥ ピンクリボン関連グッズを使用すること。

参加方法は、どんな形でも自由です。性別、年齢、社会的な立場など気にすることなく参加できます。

2. 足立区での活動

たんぽぽの会

足立区がサポートを行っている乳がん体験者の会です。乳がん罹患された方々の情報交流の場でもあり、悩みや不安を共有します。区のイベントに積極的に参加なさっていて、乳がん検診受診啓発活動や正しい自己触診方法を広める活動を行っています。千住保健総合センターに本部があります。最近では、がん体験者の方が自らを「がんサバイバー」とおっしゃりますが、がんが治癒した人だけを意味するのではなく、がんと診断された直後から、治療中の方、また、その家族や介護者も含めて定義されているようです。その意味では、サバイバー(生存者)というよりもがん体験者あるいは、がん経験者といった意味で使用されています。たんぽぽの会は、区のサポートのもと早い時期から活動されています。毎年行われているピンクリボンあだちは、企画から運営までたんぽぽの会が中心的な役割を担って区と共催で行っています。

ピンクリボンあだちについて

毎年10月に区内で行っているピンクリボン運動です。今年で11年目を迎えました。当初は、たんぽぽの会で行い、平成20年度からたんぽぽの会と区の共催になり、平成24年度からは実行委員会方式で運営されています。団体だけではなく、企業や検診機関も協力しています。都内自治体が行うピンクリボン運動に企業が参加しているケースは珍しく、関係者からは注目されています。

さて、具体的な活動ですが、乳がんから女性を守るために検診受診の啓発と正しい自己触診方法の指導など乳がんについての理解を深めることが目的です。以下の活動が行われます。

- ① ウォーキング：乳がん検診受診を呼びかけます。たんぽぽの会の方が中心に乳がん検診受診をアピールしながら区内を行進します。区長もできる限り一緒に参加しています。
- ② 講演会：乳がん専門医による正確な情報を得る事が出来ます。今年度は、日本乳癌学会名誉会長の霞富士雄先生の講演でした。

- ③ マンモグラフィ疑似体験コーナー：私がお手伝いしているコーナーになります。たんぽぽの会の運動のお手伝いが少しでもできればとの意志から始めました。

マンモグラフィは、怖い、痛いというイメージがあります。乳房が付帯しているベストを装着して、実際の撮影装置で乳房をはさみます。マンモグラフィ撮影では、どうして乳房を引っ張ったり、機械で圧迫しなければならないのか。そうすることで、しこり(腫瘤)を形成する前の早期の段階、また、しこりとして認識されにくいがんの発見が可能になることを説明します。

対象者は、40歳以上の乳がん検診未受診者から将来乳がん検診を受ける若年層の方です。また、パートナーの方の協力がなければ検診を受けに行く時間もとれないとの声も多く、男性の方や夫婦の方にも案内をしますが、男性のほとんどは参加しません。

このコーナーは、区の保健師さんやボランティアの方々が、住民の皆様の声をかけることから始まります。午前中から夕方まで立ちっぱなしのために、非常に大変なことだと思います。感謝をするとともに、頭がさがります。



10月はピンクリボン月間です。

日本人女性の15人に1人が乳がんにも早期発見・早期治療で90%以上の方が治療。

だから、乳がん検診に行こう。

10.16(木)
参加自由・参加費無料

ピンクリボンあだち

ミニウォーク
集合午後0時50分(午後1時出発)
北千住マルイ1階交番横(東口)
コース：北千住駅
↓
東京芸術センター
会場：たんぽぽの会
(独立系乳がん検診センター)

講演会
午後2時～4時
天空劇場
〒141-1 東京芸術センター21F
講師：霞 富士雄氏
(日本乳癌学会 名誉会長)
座長：大塚 信博氏
(日本乳腺学会 理事)
共催：アストラゼネカ(株)

マンモグラフィ検診車体験
午前10時～午後4時
東京芸術センター前広場
協力：駿川 聖治氏
(検診機関 東京芸術センター)

協力：たんぽぽの会(独立系乳がん検診センター) アストラゼネカ(株) コー(株) (一社)独立系検診センター 検診会エヌ・ケイ・クリニック
主催・問い合わせ先：ピンクリボンあだち実行委員会(事務局) 独立系検診センター検診センター事務局内 03-3800-5121 (検診)

当日の様子です。





- 名前
りぼんちゃん
- 名前の由来
ピンクリボンのぱっちゃん留めがチャームポイントの小学4年生。りぼんは髪の毛に3個、靴にも1つずつ。(色はもちろんピンク)
- お仕事
ピンクリボンあだちのキャラクター。乳がん検診を受けよう！をPRする。区民の方に乳がん検診の大切さを知ってもらうこと。
- 主な活動場所
ピンクリボンあだちのポスター、ちらし、ホームページ
- 「りぼんちゃん」からのひと言
ママは40歳で足立区の乳がん検診受診開始年齢。りぼんちゃんはママが大好き！「ママ、検診受けてね」足立区H.Pから引用

低迷する乳がん受診率向上のためにさまざまな試みがされています。

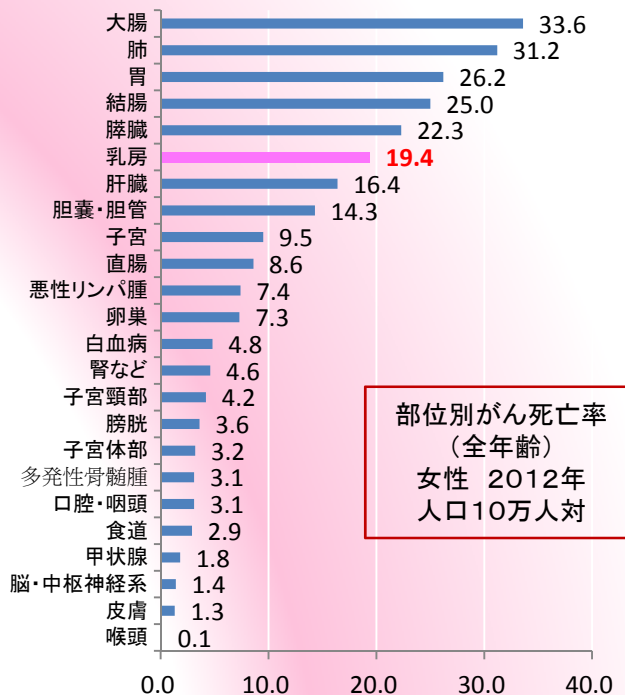
上記キャラクターもその一つです。皆さんはどう思われますか。彼女は、母親だけに乳がん検診を勧めている訳ではないと思います。多くの乳がん検診未受診者の方に語りかけていると思います。

3. 乳がんについて

日本人女性の何人が乳がん罹患するのか

部位	生涯がん罹患リスク(%)		何人に1人か	
	男性	女性	男性	女性
全がん	60%	45%	2人	2人
食道	2%	0.40%	45人	227人
胃	11%	6%	9人	18人
結腸	5%	5%	18人	19人
直腸	3%	2%	31人	53人
大腸	9%	7%	11人	14人
肝臓	4%	2%	25人	44人
胆のう・胆管	2%	2%	61人	56人
膵臓	2%	2%	45人	45人
肺	10%	5%	10人	22人
乳房(女性)		8%		12人
子宮		3%		35人
子宮頸部		1%		76人
子宮体部		1%		72人
卵巣		1%		82人
前立腺	8%		12人	
悪性リンパ腫	2%	1%	56人	75人
白血病	0.90%	0.70%	113人	151人

どの部位のがん死亡が多いのか

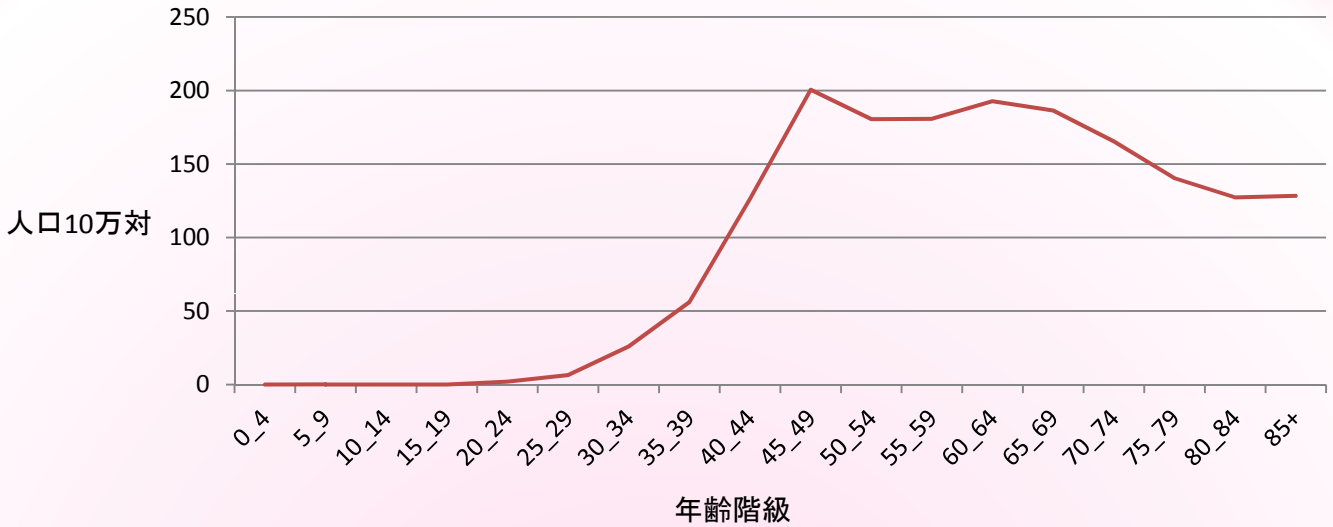


乳がん罹患する確率 累積罹患リスク(2010年データ)：日本人女性の12人に1人は、乳癌に罹患します。最近までは、15人に1と言われていました。しかし、死亡率は、6位(2012年データ)です。つまり、早期に見つけ治療を行う事が出来れば、生命に影響を及ぼすことが非常に少ないと言えます。

データ：独立行政法人がん研究センターがん対策情報センター発表

どの年代の女性の乳がんが多いのか

年齢階級別罹患率 2010年



年代別にみると、乳がん罹患率は、30代後半から急激に増加し40代後半にピークを向かえます。また、閉経を迎える60代後半からもう一つのピークがみられます。これは、閉経後60～70代の女性に乳がんが多い欧米のパターンに似ていて、今後、欧米のパターンに似てくるといわれています。

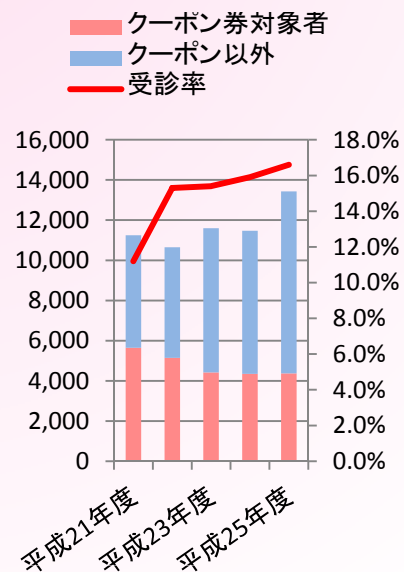
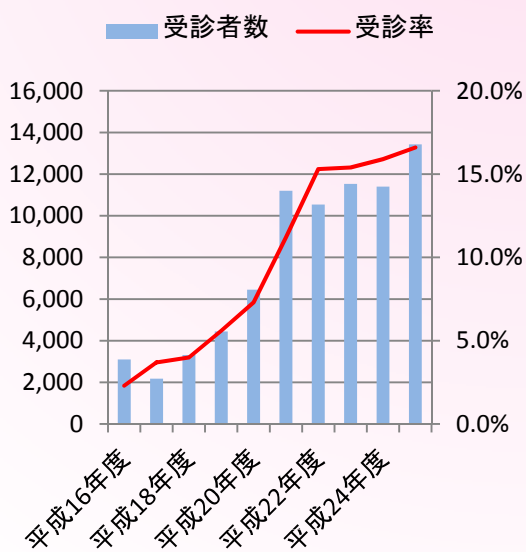
20代の若年層の乳がんも見られ、自己触診などの必要性が感じられます。

データ：独立行政法人がん研究センターがん対策情報センター発表

4. 対策型足立区乳がん検診状況

受診率と受診者数 平成16年度から25年度

クーポン券使用状況



足立区の受診者数ならびに受診率は増加していますが、未だに16%ほどです。東京都の目標は50%ですが、都の平均も17.5%と低い状態です。

女性特有のがん検診無料クーポン券利用者は、年々減少し、自己負担金2,500円を支払い受診する方が増えています。

がん検診の質を評価する指標(プロセス指標) 足立区

	あるべき値	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
	(許容値等)					
受診率	50%	11.2%	15.3%	15.4%	15.9%	16.6%
要精検率	11%以下	8.4%	7.4%	7.1%	6.4%	5.1%
精検受診率	80%以上	84.3%	30.1%	79.9%	51.3%	66.0%
精検未把握率	10%以下	12.2%	13.7%	17.4%	47.0%	30.9%
精検未受診率	10%以下	3.5%	4.0%	2.7%	1.7%	3.1%
陽性反応的中率	2.5%以上	4.3%	4.5%	5.2%	5.5%	5.3%
がん発見率	0.23%以上	0.366%	0.351%	0.373%	0.351%	0.270%

足立区は、都内自治体のなかでも、がん発見率、陽性反応的中率は高く、要精検率は低い値を示します。都内でも良い値です。これは、マンモグラフィ検査や視触診判定が高精度に保たれているからです。

当院では、西副院長と小関先生が医師会で行われているマンモグラフィ二次読影委員として、二人目読影に参加しています。また、放射線技師も読影補助として参加しています。

受診率は全国では30%を超えますが、東京都平均は17.5%、足立区は16.6%です。

データ：東京都保健福祉局

5. 乳がん検診について

乳がん検診の種類について

がん検診には、①対策型検診と②任意で行われるドック検診があります。さらに、対策型検診は、地域で行われる住民検診と職域検診(オプションなどについてはドック検診と同等)に分かれ、ドック検診は、施設、受診者の要望、最近ではリスクに応じた(特定のがんに罹患する確率が高い方)検診などがあります。

対策型検診は、科学的な根拠に基づいた検診を行わなければいけません。科学的な根拠とは、死亡率を下げる十分な根拠があるか、ということになります。また、費用効果費が十分に考慮されなければいけません。がん発見率が高い検査が、住民の死亡率を下げる根拠にはならず、特に医療関係者において、がん検診方法について論議になります。

マンモグラフィを用いた乳がん検診は、世界的に導入されている対策型検診方法で、日本では、40歳以上の無症状な女性を隔年で(2年に1回)行います。乳がん検診で唯一死亡率を下げる事が出来るエビデンスを持っています。

乳がん検診の種類について

40歳以上の方は、マンモグラフィが基本とされています。若年層の方は、USが推奨されます。

日本乳がん検診学会では、リスクが高い方の検診については、MRIを推奨しています。また最近、遺伝子的な検査も行われるようになりましたが、「自分の遺伝子を知るという意味」について、十分な理解が必要です。

次年度には、マンモグラフィとUSとの総合判定マニュアルが発行されます。それぞれのモダリティで別々に判定されていた結果が統一した基準で判定できます。要精検率の低下につながります。判定者はもちろん、検査者も十分な理解が必要です。

当院での取り組みについて

当院では、特定非営利活動法人 日本乳がん検診精度管理中央機構(精中機構)のマンモグラフィ読影認定医師、技師、施設認定、乳房超音波撮影認定技師が在籍しています。その他に、ピンクリボンアドバイザーも在籍しています。検診についての十分な精度管理を実施しています。

診療については、当院外科において、画像診断、CNB、術前化学療法、手術、希望による連携病院への紹介、ホルモン療法を含めた術後の管理を行っています。また、医科歯科大学乳腺外科の非常勤医師による専門外来も行われています。

新たに入職された樋口先生は、乳腺外科専門医でもあり、増加する乳がん診療に対応し、きめ細かな診療が出来る体制を整えています。

●**精中機構**：画像を用いた乳がん検診の精度管理について検討し、医師・放射線技師・臨床検査技師・看護師や検診実施機関・精密検査実施機関、一般住民や患者団体に対して、教育研修・評価認定事業、検診啓発事業、患者団体との連携等の事業を全国規模で行なうと共に、本邦内外における精度の高い画像を用いた乳がん検診の普及、ひいては乳がん死亡低下のために寄与することを目的とする。(精中機構H.Pより引用)認定試験は、資格取得後5年ごとに行われ、試験に受からない場合は資格が消滅します。非常に厳しい試験です。

●**精中機構関連学会**

- ・日本乳癌検診学会
- ・日本乳癌学会
- ・日本医学放射線学会
- ・日本産婦人科学会
- ・日本放射線技術学会
- ・日本医学物理学会
- ・日本乳腺甲状腺超音波医学会
- ・日本超音波医学会
- ・日本超音波検査学会

● **ピンクリボンアドバイザー**：認定NPO法人乳房健康研究会が行っている認定制度です。

設立目的

乳がんによさしい社会にむけて

- ・乳がんや乳がん検診に関する正しい知識を持っていただく
- ・周囲の人に乳がん検診受診を勧める人を増やす
- ・乳がんに関わるさまざまな問題を理解し、その解決のために行動する人をつくる
- ・乳がんや乳がん検診、ピンクリボン運動に関する新しい情報を共有できるようにする

ピンクリボンアドバイザーの役割

- ・乳がん検診を受けようとしている人のサポーターとなる
- ・正しい知識・情報を持って、まわりの人に乳がん検診を勧める
- ・地域の保健師や乳がんに関わる専門家などと連携し、まわりの人と専門家の間のつなぎ役となる(ピンクリボンと乳がん まなびBOOKより引用)

6. まとめ

この度、理事長より、ピンクリボンあだちや乳がん検診について、職員の皆様にご紹介をする機会を頂きました。乳がんは、30歳以上の女性の年齢別がん罹患率の1位です。日本人女性の12人に1人は乳がん罹患します。この年代は、社会や家庭で重要な役割を担う方々です。また、私たちが働く医療に関係する職場では、この年代の多くの女性が活躍しています。

進行した乳がんから命を守るために、自己触診や適切な検診受診は非常に重要ですが受診率は低迷しています。特に、都心部では地方に比べて乳がん罹患率が高いにもかかわらず、対策型検診の受診率は低迷しています。一方、乳がんは他のがんに比べて、早期に発見できれば死亡率は高くはありません。

私たちは、区や全国のピンクリボン運動を通して、正しい検診受診の重要性をお伝えしています。ピンクリボン運動に参加する方法はさまざまですが、まずは月に一度の自己検診を行うこと。パートナーやまわりの方に勧めること。最初の一步を始めて頂きたいと願います。